



所在地 伊勢原市子易地内

調査期間 令和2(2020)年4月1日～

令和3(2021)年3月31日

調査面積 3522㎡

担当者 池田 治、穴戸信悟、

諏訪直子、塚田順正、

野坂知広、南出俊彦

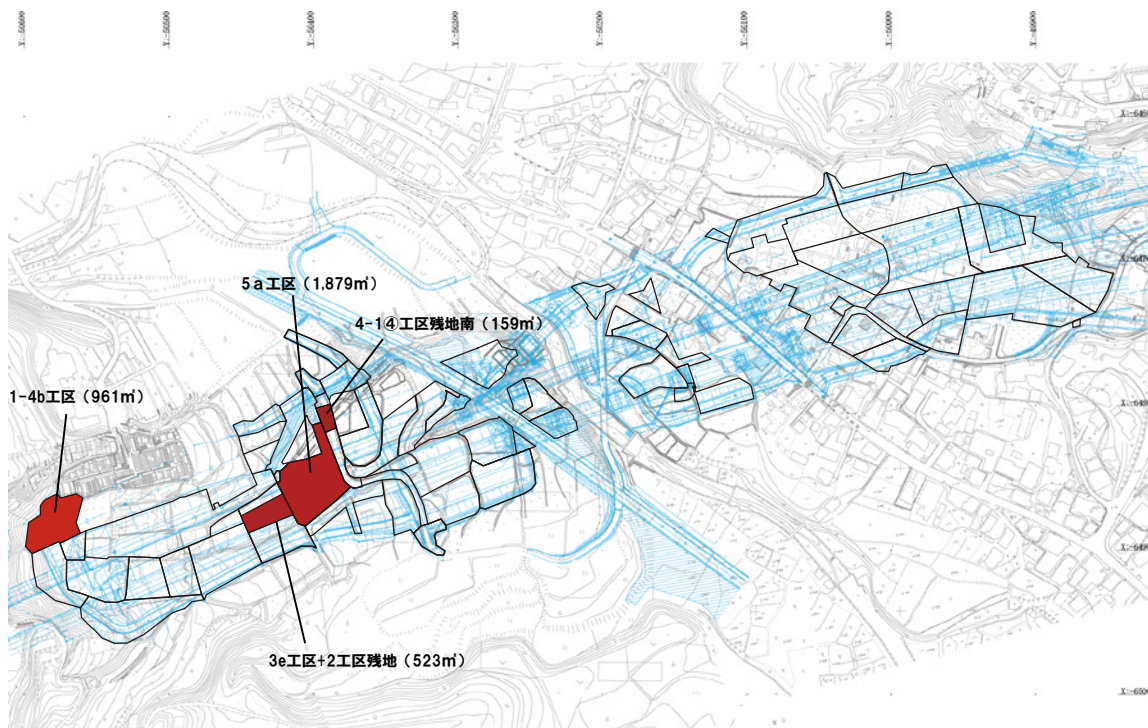
調査概要

子易・中川原遺跡は、伊勢原市子易地区に所在する周知の遺跡で、新東名高速道路建設事業に先立ち、平成24年9月より発掘調査を実施しています。調査は今年度も継続中で、新たな発見が相次いでいます。本遺跡は、標高108～130m程の丹沢山地南東山麓から鈴川右岸段丘面に立地しています。



第1図 調査位置図 (1/25000)

令和2年度は、4地点(3e工区+2工区残地/5a工区/1-4b工区/4-1④工区残地南)の調査を行いました。発見された遺構・遺物の時代は、近世、中世、奈良・平安時代、弥生時代、縄文



第2図 令和2年度調査区配置図 (1/5000)

時代に亘っています。

3e 工区 +2 工区残地の調査

前年度から継続して縄文時代～弥生時代面の調査を実施しています。両地区は谷地形に当たり、前年度から弥生時代の河道（自然流路）が発見されていました。土壌に水分が多く含まれた湿地的環境にあり、河道の底から検出された土坑内には、太い丸太やクルミの実などが検出されています。

縄文時代面では、谷地形へ落ち込む北側斜面で溝状遺構や陥穴状土坑などが発見されています。また、下層のトレンチ調査によってローム層内に大小の地割れと地滑りの痕跡が確認されました。



写真 1 3e 工区 +2 工区残地縄文時代河道全景（南から）



写真 2 3e 工区 +2 工区残地 Y11 土坑丸太検出状況（西から）

5a 工区の調査

奈良・平安時代面、弥生時代面、縄文時代面の調査を実施しています。奈良・平安時代面は、谷部分のみに遺構面があり、河道（自然流路）と土坑が発見されています。

弥生時代面では、台地部分の土坑と谷部の地山を深く削り込んだ河道が確認されています。この河道は隣接する 3d 工区、3e 工区から続くものです。河道の覆土はスコリア層とシルト層が互層になっており、多量の木質（流木）やトチの実などが出土しています。台地部分では、陥穴状土坑が複数検出されています。

縄文時代面も谷部分と台地部分に分けられますが、谷部分では弥生時代の河道に切られる



写真 3 5a 工区弥生時代河道全景（西から）



写真 4 5a 工区 J2 土坑木材・種実検出状況（南から）

ように土坑が検出されています。

土坑の覆土は粘性が強く、スコリア質を多く含む弥生時代の河道覆土とは明らかに異なります。土坑底面は平坦に作られており、木質とともにクルミの実が多量に出土しました。これらの土坑は複数基確認されていますが、すべて河道左岸（北岸）に限定して分布しています。河道左岸には縄文時代中・後期の集落が展開しています。

台地部分には、縄文時代中期中葉～後葉および後期前葉～中葉の集落が発見されており、令和2年度の調査では、縄文中期の竪穴住居跡4軒、縄文後期の敷石住居跡7軒が確認されています。



写真5 5a工区縄文中期住居群完掘状況（東から）



写真6 5a工区J24住居土器出土状況（東から）

縄文中期の住居は、石囲炉と周溝を持つタイプであり、住居主体部の直径は約3～5mと小ぶりの住居が多い傾向にあります。J24住居は、覆土中に多量の半完形土器が投げ込まれたような出土状況でした。

縄文後期の住居は、石囲炉の周囲および張出部にのみ敷石が配置されるタイプがほとんどで、後期前葉でも新しい時期の所産と推定されます。これらは、隣接調査区で過年度に調査された縄文集落と一体のものであり、等高線に沿った居住域の展開が改めて確認されました。

4-1 ④工区残地南の調査

近世面、中世面、縄文時代面の調査を実施しています。



写真7 5a工区J26住居完掘状況（南から）



写真8 5a工区J23住居焼成面検出状況（東から）

狭い調査範囲ですが、現道に沿って近世以降の石垣が確認されています。

石垣の下に潜り込むように近世の大きな溝状遺構があり、周辺の縄文集落から流れ込んだ大型礫が出土しています。

この近世の溝状遺構に切られているため、部分的な検出ではありますが、縄文時代後期前葉～中葉の竪穴住居跡が5軒確認されています。J37 住居の覆土中には小配石が置かれており、安置されたかのように異形台付土器がほぼ完形で出土しました。

1-4b 工区の調査

令和2年度は、近世面、中世面の調査を実施しています。当地には明治以降に廃寺となった



写真 9 4-1 ④工区残地南 K7 溝状遺構検出状況（南から）



写真 10 4-1 ④工区残地南 J37 住居異形台付土器出土状況

そうけいざんあんらくじ
僧慶山安楽寺（曹洞宗）に関わる礎石が確認されています。

近世寺院面の下位からは、宝永火山灰を多く含む畝状遺構が面的に検出されています。

さらに下位にあたる中世面では、隣接調査区から続く中世前期の寺院跡に関わる礎石建物（墳墓堂）や掘立柱建物、井戸、溝状遺構、石組墓、ピットなどの遺構群が確認されました。

調査は今年度も継続して行われており、貴重な発見が相次いでいます。

特に、今回発見された礎石建物（墳墓堂）は、地山削り出しの方形基壇を持ち、地山部分の上位にさらに盛土をして基壇を構築しています。

方形基壇は上端部分で一辺約 5 mの規模を測



写真 11 1-4b 工区近世礎石群検出状況（南から）



写真 12 1-4b 工区近世畝状遺構全景（東から）

り、ほぼ正方形に作られています。基壇上端には縁石が方形に配置され、これらは基壇地山部分の上に配置されています。

縁石の内側にはさらに東西三間×南北三間の礎石がやはり方形に配置され、その規模は一辺約4mを測ります。南東側の礎石4個は後世の攪乱により削平されたため、検出されなかったものと考えられます。

礎石も基壇地山部分に直接あるいは根固め石を介して配置され、さらに盛土によって固定されています。

基壇中央部には常滑産の大甕2個体が埋められています。ともに甕の中には焼土・炭化物・灰などとともに、火葬骨が少量混じっている程

度でした。

甕の新旧関係は判然としませんが、写真14では、手前側が新しく、奥側が古い可能性があります。

石組墓は3基確認されており、特に遺存状態のよい1基は、大きな石を長方形に2段配置して、内側に玉石を積み上げています。玉石の下位には土坑があり、土坑内部からは炭化物に混じって火葬骨が検出されています。

石組墓の範囲内からは、およそ13世紀代のかかわりや青磁などが出土しています。

まとめ

令和2年度に調査した4地点のうち、3e工区+2工区残地および5a工区では、谷地形の



写真13 1-4b工区中世礎石建物（墳墓堂）全景（東から）



写真15 1-4b工区中世石組墓群全景（東から）



写真14 1-4b工区中世礎石建物常滑大甕近景（東から）



写真16 1-4b工区中世石組墓近景（東から）

部分で弥生時代・縄文時代の河道（自然流路）が確認されました。

河道底面には土坑が配置され、堅果類のアク抜きなどに利用された可能性があります。

5a 工区で発見された縄文時代中期中葉～後葉および後期前葉～中葉の集落は、過年度調査により確認されていた縄文集落と一体となって広がっており、等高線に沿った居住域の展開が再確認されました。4-1 ④工区残地南の縄文集落も同様と考えられます。

1-4b 工区で発見された中世前期の寺院跡については、これも過年度調査の成果と併せて考える必要があります。今後とも子易地区における中世全体の様相を総合的に捉え、景観復元を試みていく予定です。（野坂）

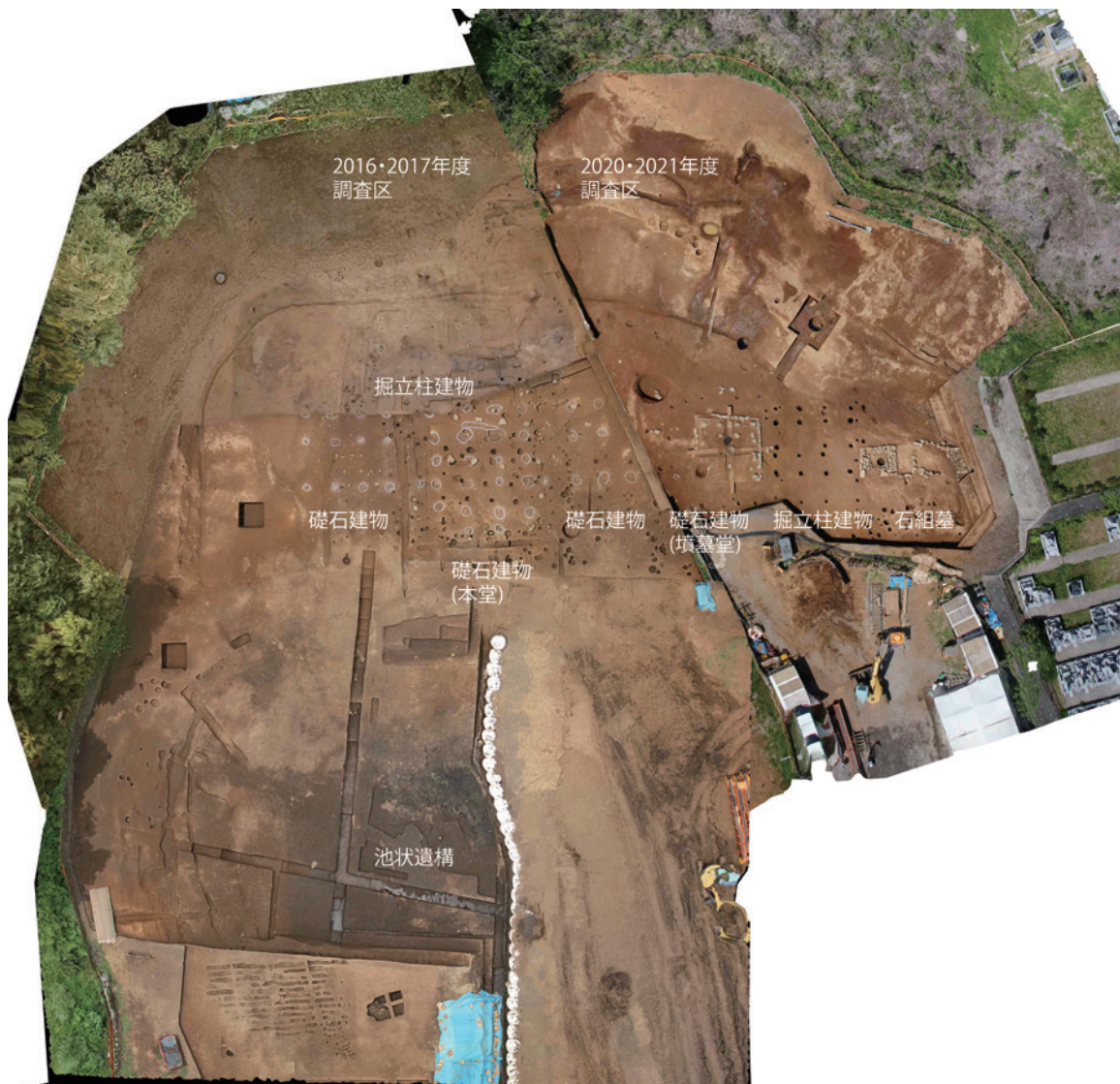
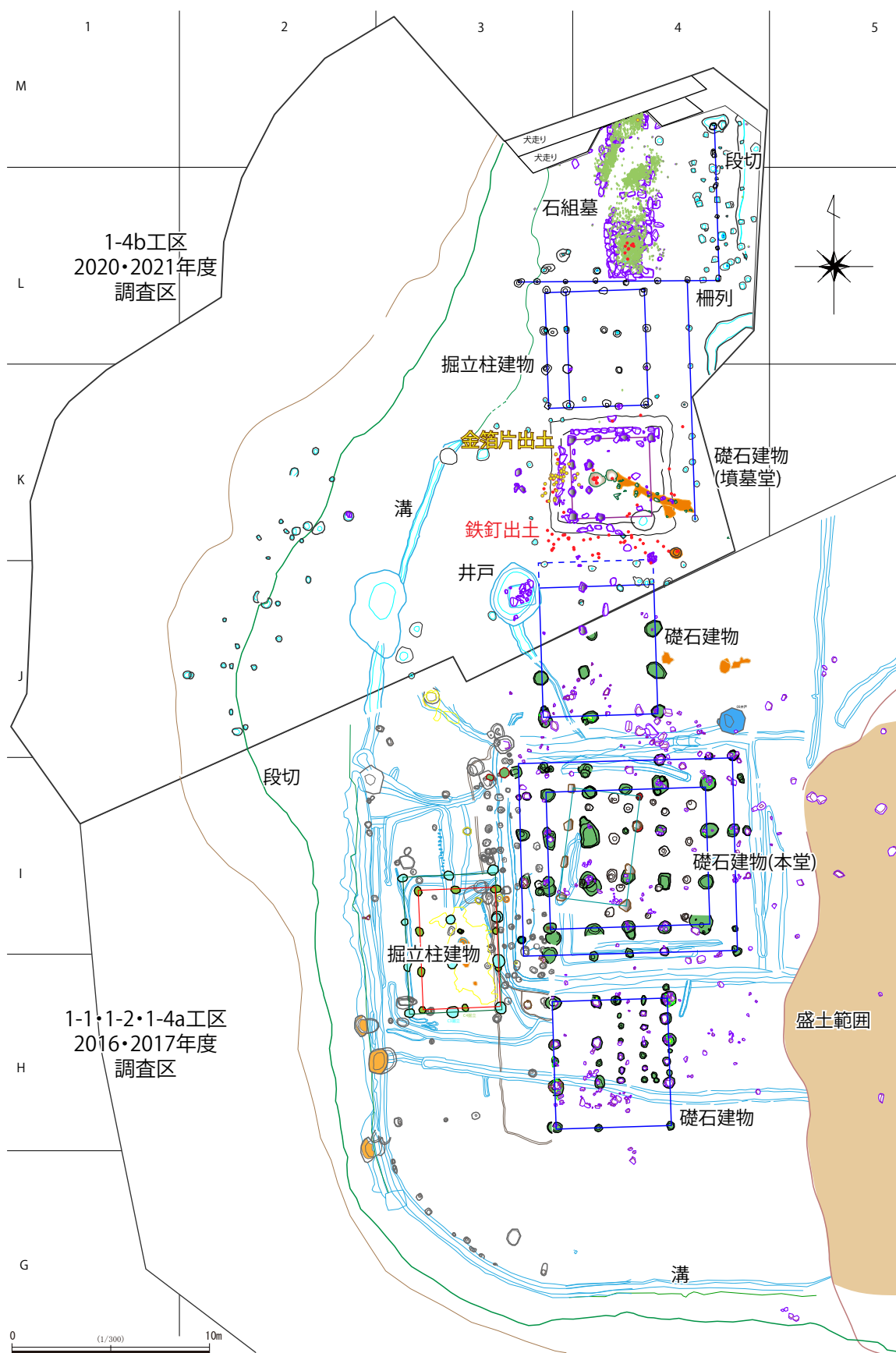


写真 17 1-1・1-2・1-4a・1-4b 工区中世寺院跡合成画像（俯瞰）



第3図 1-1・1-2・1-4a・1-4b 工区 中世寺院跡全体図 (1/300)